

地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る —事例研究—

喜多 一馬* 池田 耕二**

An Explorative Study of the Possibility of a Hot Springs Trip as a Community-Based Rehabilitation Service : A Case Study

Kazuma KITA * Koji IKEDA**

*北大阪ほうせんか病院 リハビリテーション技術科 (〒567-0052 大阪府茨木市室山 1-2-2)

* Department of Rehabilitation, North Osaka Housenka Hospital. (1-2-2 Muroyama, Ibaraki-shi, Osaka 567-0052, JAPAN)

**奈良学園大学 保健医療学部 (〒631-8523 奈良県奈良市中登美ヶ丘 3 丁目 15-1)

** Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomioka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

要旨

【目的】本研究の目的は、地域リハビリテーションのソフトインフラとして温泉旅行を整備するため、温泉旅行および温泉旅行の各活動場面に要介護高齢者に与える影響を明らかにすることである。

【方法】日帰り温泉旅行に参加した要介護高齢者 2 名を対象に、半構造化インタビューを行った。インタビューでは温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度と対象者や家族等の変化を調査した。

【結果】A 氏は入浴を含めた温泉旅行の全活動場面を楽しんでいた。また、脳卒中後 10 年間行くことはなかった温泉旅行に再び行こうとしており、温泉旅行の参加に対する自信を回復していた。B 氏は温泉旅行の入浴以外の準備、移動を楽しんでおり、温泉旅行で新たな人間関係を構築していた。

【結論】本研究では、温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行は個々の要介護高齢者に様々な影響を及ぼすことが示唆された。その影響としては、自信の回復や人間関係の再構築を促進させることが示唆された。

キーワード： 地域リハビリテーション, 温泉旅行, 要介護高齢者

1. はじめに

我が国には温泉旅行という文化があり、医療、療養だけでなく、高齢者の生きがいや趣味としても人気が高い¹⁻³⁾。そのため、温泉旅行を地域リハビリテーション(以下、リハビリ)のソフトインフラとして整備・応用する意義は大きい。インフラとは下支えするものを意味しており、道路や住宅等のハードインフラと、目に見えない仕組みや方法論等からなるソフトインフラがある。本稿では温泉旅行をソフトインフラの一つとして捉えることとする。

次に、リハビリ医療に関する温泉旅行の主な効果としては、これまでは温泉浴による身体機能や疾病の改善効果⁴⁻⁸⁾、温泉旅行参加による QOL 改善効果⁹⁻¹¹⁾ が示唆されてきた。しかし、前者は温泉浴に、後者は温泉旅行全体に焦点化したものであり、温泉旅行が有する企画、移動、入浴、お

土産物選び、思い出話等、各活動場面の効果を積極的に検証したものではない。おそらく、同じ温泉旅行でも個々の高齢者が楽しいと感じる活動場面は異なり、温泉旅行の楽しみ方も異なると考えられる。

また、前述した温泉旅行の効果以外にもストレス低減効果¹²⁾ や睡眠改善効果¹³⁾ を示す研究があり、さらに昨今では、日帰りハイキング旅行における感情変化の研究¹⁴⁾ や精神的健康を目指すメンタル・ヘルスツーリズム¹⁵⁾、健康を目指すヘルスツーリズム¹⁶⁾ 等に関する研究も報告されている。これらの研究では、旅行参加者の多様な変化(効果)や新たな旅行の在り方が論じられている。しかし、得られた知見を地域リハビリへどのように応用するかまでは言及していない。よって、ソフトインフラとして温泉旅行を整備することは、地域リハビリの課題の一つになると考えることができる。

他方、これまでのリハビリにおける温泉旅行では、参加自体がゴールであり、参加で満足し、終了していた感がある。そのため、温泉旅行が個々の高齢者にどのような影響を与えるのかや、どのようにQOLを向上させるのかについては明らかになっていない。生き方や価値観が多様化している現代社会では、温泉旅行が個々の高齢者に与える影響やQOLを向上させるメカニズムは違うと推察することができ、ときには本人が自覚できない変化もありうると思われる。こうした変化を的確に捉え明らかにしていくためには、信頼関係のなかで会話内容を丁寧に聞きほぐし、解釈していく必要がある。これらができればリハビリとしての温泉旅行はさらに多様な効能を活かした旅行へと変貌することが期待できる。以上を踏まえ、温泉旅行をリハビリのソフトインフラとして整備するためには、温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行全体が、個々の高齢者に与える影響を改めて明らかにしていく必要があると考えた。

そこで本研究は、リハビリのソフトインフラの整備に向けた予備的研究として、温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行が、個々の要介護状態にある高齢者（以下、要介護高齢者）に与える影響を事例研究法によって探索することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象

対象は、N県の株式会社Aと有限会社Wが手掛ける旅行支援サービスである日帰り温泉旅行に参加した地域在住の要介護高齢者のなかで、とくに特徴的なエピソードを有していた2名とした。なお、本2名は有限会社Wが経営するデイサービスの利用者であり、日帰り温泉旅行には別々に参加していた。

2.2 温泉旅行の概要

本旅行は、要介護高齢者が2～3名ごとに参加する日帰り温泉旅行である。有限会社Wのスタッフよりデイサービス利用者に日帰り温泉旅行の概要の説明がなされ、利用者が興味を持てば申し込むというものである。本旅行では理学療法士2名と介護福祉士2名がスタッフとして付き添うことになる。旅行の行程としては、旅行当日は午前中にスタッフが車で自宅へ迎えにいき、温泉旅館までの搬送（移動）となる。到着すると露天風呂のある温泉に入浴し、その後に懐石料理を食べ、旅館内で土産物を購入し、帰路につく。帰りに時間があれば地域の土産物屋に立ち寄ることもある。

2.3 データ収集方法

対象者2名のA氏とB氏の基本的情報については、事前に有限会社Wより情報収集を行った。なお、有限会社Wスタッフに、本対象者から得られるインタビューデータには

特に問題がないことを確認した。

次に、日程と場所を設定し、A氏は自宅、B氏は有限会社Wの施設内にて約60分間の半構造化インタビューを一回実施した。インタビューでは豊かな語りを引き出すため、研究者と本旅行に同行したスタッフも参加した。インタビュー調査の期間は2019年9月24～26日であった。

インタビューでは、設問を5項目作成し活用した（表1）。設問1では、本旅行にある活動場面を13過程の項目に分類し、a)各活動場面の楽しみの程度を比較する目的で、活動場面ごとに表1のように「5:かなり楽しい」、「4:けっこう楽しい」、「3:楽しい」、「2:どちらかという楽しい」、「1:どちらでもない」の5段階で評価を聴取した。このとき、楽しくなかった場合や答えづらい場合には、答えなくてもよいという回答方法を準備した。

本研究において評価に本工夫（試み）を取り入れたのは、個人によって微妙に異なる各活動場面の楽しみの差異を明らかにしたいと考えたためである。微妙な差異を抽出するためには、できるだけ利用者がインタビューに答えやすくすること、また各活動場面での微妙な楽しみの差異を抽出しやすくすることが必要となる。そこで、同行スタッフのいるインタビューに楽しくないという答えを出さなくてもよいように配慮し、そのうえで楽しさの中の微妙な差異を聞きとるという工夫を行った。ただし、本工夫は利用者内の各活動場面の差異を明らかにすることには有効に機能すると思われるが、その妥当性や有効性については不明瞭な部分があるため、厳密な意味での検討は今後の課題と考えられる。

次に、設問2～5を活用し、b)語りから変化を読み取る目的で、対象者や家族等の周囲にどのような変化があったのかを探求しながらインタビューを行った。インタビュー実践時は対象者の語りを妨げないよう注意し、詳細で豊かな内容を引き出すことに努めた。インタビューの内容は対象者の許可を得たうえでICレコーダーに録音した。

2.4 分析方法

a) 各活動場面における楽しみの比較

各活動場面における楽しみの程度を対象者ごとに確認し、その傾向を分析した。

b) 語りから読み取れる変化

録音した音声データの内容を、何度も繰り返し聴きこみながら全体の印象を掴みとり、本旅行に参加したことによる変化という関心に基つき、音声データから特徴的な語りの箇所を抽出した。

次に、抽出した音声データをテキストデータに変換し、それらをもとに対象者ごとに変化の内容を解釈・分析した。分析は10年以上の理学療法士経験を有する筆頭研究者と20年以上の理学療法士経験を有し、質的研究に精通する共同

研究者2名で行い、分析結果の信憑性や妥当性を担保した。

が可能であること、研究結果の公表等について説明を行い、同意書に署名をもらいインタビューを実施した。また、本研究は奈良学園大学倫理委員会で承認を得た（承認番号 31-024）。

2.5 倫理的配慮

対象者には、書面と口頭にて本研究の意義・目的、研究方法、プライバシーの保護、研究参加の自由、中断や取り下げ

表1. インタビューガイド

2019年 月 日

氏名： 質問者：

設問1：温泉旅行に参加して、とくに楽しかった活動場面はどれでしたか？

以下の数字から回答してください。

楽しくなかった場合や答えたくない場合には、回答しなくても構いません。

かなり楽しい	けっこう楽しい	楽しい	どちらかという楽しい	どちらでもない
5	4	3	2	1

旅行行程

- 準備 企画段階 ()
- 申し込み時 ()
- 服装・髪型の準備 (例：美容院) ()
- 移動 移動そのもの ()
- 移動中のだんらん ()
- 移動中の普段とは異なる景色 ()
- 到着 駐車場からラウンジ、部屋まで ()
- 入浴 着替え ()
- 露天風呂 ()
- 懐石料理 普段と異なる料理、環境 ()
- お土産 お土産物選び ()
- 移動 帰りの車内 ()
- 帰宅後 帰宅後の思い出話 ()

設問2：温泉旅行に行く前は、行けるとは思っていなかったですか？

(どこか温泉旅行に行くことを諦めてなかったですか？)

設問3：温泉旅行の際にどのとき、どの活動場面が一番楽しかったですか？

また、なぜ、そう思ったのかをお教えてください。思い出話をお教えてください。

設問4：今回の温泉旅行を通して、自分の気持ち(心理)や行動に、何らかの変化がありましたか？

それは、どのような変化でしたか？

また、どの時期のどのような事柄を契機に変化が生じたと思いますか？

設問5：温泉旅行後の自分自身や生活に変化がありましたか？それは、どのようなものですか？

3. 結果

3.1 A 氏, B 氏の基本的情報

A 氏：70 歳代前半の男性，妻と二人暮らしであった。要介護 1，認知症高齢者の日常生活自立度は自立，障害高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）は A1 であった。約 10 年前に脳血管疾患を患っており，運動麻痺と軽度の失語を有していた。歩行は要介助であり，デイサービス以外の外出は近所を散歩する程度であった。また，元々は温泉愛好家であったが，発症以降は温泉に行くことはなかった。

本インタビューでは A 氏は軽度の失語を有していたことから十分な語りを引き出すことは困難であると考え，A 氏の妻に同席してもらい補足してもらった。なお，本旅行では金銭を所持しておらず，お土産物選びには参加していなかった。

B 氏：80 歳代後半の女性，独居生活であった。要介護 1，認知症高齢者の日常生活自立度は I，障害高齢者の日常生

活自立度（寝たきり度）は A1 であった。2～3 日に一度はデイサービスに通っていた。心疾患や整形外科疾患，脳血管疾患はないものの，屋外歩行には一部介助を要した。また，親しく交流する友人は近くにいたものの，親族等と会う頻度は年に数回であった。なお，本旅行では「入浴は嫌い」とのことから露天風呂のある温泉浴には参加しなかった。

3.2 各活動場面における楽しみの比較

インタビューにおける設問 1 の各活動場面の楽しみの程度を対象者ごとに比較した。

A 氏：露天風呂を 5，本旅行への申し込み時を 4 としていた。その他の懐石料理や温泉地への移動，帰宅後の思い出話等は 3 としていた（表 2）。

B 氏：企画段階を 5，申し込み時，服装・髪型の準備，帰宅後の思い出話を 4 としていた。しかし，懐石料理やお土産物選びは 1 としていた（表 2）。

表2. 事例A, Bにおける各活動場面における楽しみの程度

		A氏	B氏
旅行行程			
準備	<input type="checkbox"/> 企画段階	3	5
	<input type="checkbox"/> 申し込み時	4	4
	<input type="checkbox"/> 服装・髪型の準備（例：美容院）	1	4
移動	<input type="checkbox"/> 移動そのもの	3	3
	<input type="checkbox"/> 移動中のだんらん	3	3
	<input type="checkbox"/> 移動中の普段とは異なる景色	無回答	無回答
到着	<input type="checkbox"/> 駐車場からラウンジ、部屋まで	3	無回答
入浴	<input type="checkbox"/> 着替え	3	無回答
	<input type="checkbox"/> 露天風呂	5	無回答
懐石料理	<input type="checkbox"/> 普段と異なる料理、環境	3	1
お土産	<input type="checkbox"/> お土産物選び	無回答	1
移動	<input type="checkbox"/> 帰りの車内	3	3
帰宅後	<input type="checkbox"/> 帰宅後の思い出話	3	4

3.3 語りから読み取れる変化

設問2～5におけるインタビューにおいて、その語りから本旅行に参加し、変化したと読み取れた箇所を抽出した。

以下、*はインタビューアーであり、「」は語りを意味している。

A氏の語り：

A氏の妻「行って自信がついたからじゃないかな。今度息子が来たら、下のお風呂（近所の温泉浴）に一緒に行ったらどう？と思ってる。な？」

A氏「（強く頷く）」

*「行ったことなかったのですよね？」

A氏の妻「元気な頃は行ってたけど、こうなってからは全然。息子が「行く？」と言っても「いい」と。今度来たら、一緒に行って、入れてもらえばいいなって。だから、それだけ成長した」

*「そういう変化があるのですね」

A氏の妻「変化があるね」

*「やってみようという気持ちが大きくなった？」

A氏の妻「そうそうそう」

A氏「温泉もね、入っても、手すりがあったもので、掴まって入ることが出来たものでよかった」

*「それはあった方が安全ですね」

A氏「手すりがあるもので、入れたな、と」

*「自分で頑張って入り終えたのは違いますか？」

A氏の妻「自信に繋がると思う」

*「リフター等でやるよりも、しんどい、怖いかもしれないけど？」

A氏の妻「（頷く）」

B氏の語り：

B氏「みんなリラックスして、みなさんいろんなことを言っていて、いろんなお話をして、楽しかったですね。そこで、今まであまりお話ししなかった人たちとお話して、帰りの車の中でしっかりお友達になって帰ってきました。それまでは体操や運動しているときにはあんまり…なんていうのかな、余所余所しいというのかな、そんな感じはなかったわけではないんです。だけど、帰ってきたらみんな仲良くなって。だからああいう試みってすごく良いんじゃないかと思えます」

*「温泉旅行に行ってから、今もお話しますか？」

B氏「そうですよ。ほんととすごく、みなさんと一緒にして、朝なんて「元気？」なんて言い方が前とは違うんです。（中略）ここ（デイサービス）でも段々とお話ができていくんですけど、ここはやっぱり個人情報ということを…だからそれなりの仲良しになるんですけど、それがやっぱり違いますね。本当に自分がある程度自分をさらけ出すところがあ

りますね。まあ、全部じゃないけどな。これはすごいことだったと思います。だからこういうところにきて、体操したりして、いろいろさせていただいて、私たちはこっちへ、今日はハーバリウムをするのですが、そういうことをやっても忙しいもので、ここで友達になるというのではないですね。だから、そういうリラックスして、どこかに行って、ご飯食べたり、お茶したり、行ける人はお風呂行ったり、そういうことはとてもいいことだと思いますね」

B氏「私はそういうわけで、ちょっと環境が違うところで生活を何十年としていたので、なんかちょっと…なんというのかな、自分は違うんじゃないかと思っていたのですが、みなさんと普通に喋ったりできるんだというのが分かったり。余計にここに来ることが嬉しくなったね」

4. 考察

4.1 A氏

A氏の各活動場面における楽しみの比較からは、入浴を中心に温泉旅行の全行程を楽しんでいたことが示唆された。A氏は、元々温泉浴が好きであったものの、脳卒中後約10年間、近所の温泉浴に行くことはなかった。しかし、今回改めて露天風呂の良さを自分なりに実感したようである。また、インタビューでは、A氏と妻が今回の温泉旅行を経験したことで、近所の温泉浴に改めて行こうとする意志が語られた。これまでは息子が帰省するたび温泉浴に誘われても断っていたが、本旅行後はA氏から温泉浴に誘おうと計画していた。これは、本旅行に参加するまでは温泉浴に対して怖さや困難さがあつたが、本旅行においてA氏自身が手すり等を用いて入浴できたことで、温泉浴に対する自信を取り戻し、怖さや困難さが軽減したためと解釈できる。また、今回のインタビューを通し、A氏と妻はこのような自身の変化に気付いた様子であり、自覚できていなかった変化であることがわかった。

これらからは、今回の温泉旅行は脳卒中後に失った温泉浴に対する自信を取り戻させ、そして新たに挑戦しようとする気持ちを育んだと解釈できる。

昨今、温泉旅行では現地のバリアフリー化が叫ばれている¹⁷⁾が、A氏が温泉にある苦難を乗り越えたことで自信を回復していたことを踏まえると、現地のバリアフリー化をどこまで進めるかは、議論の一つとなろう。具体的には、リハビリとしての温泉旅行ではクリアできる程度の苦難を組み込み、それを乗り越えることで自信を取り戻せるような仕組みが旅行にあってもよいといえる。そうした工夫が、利用者の自信の回復を促し、社会参加を促進すると考えられ、本効用はリハビリとしての温泉旅行の可能性を示すものと期待できる。

4.2 B氏

B氏は、入浴が嫌いであったため、今回の温泉旅行では温泉浴に参加しなかった。しかし、B氏の各活動場面における楽しみの比較からは、温泉浴以外の準備、移動を楽しんでいたことが示唆された。インタビューでは、B氏からは、本旅行を通じて友達ができたことが語られた。本旅行ではリラックスして他の参加者と交流することができ、これまで出せなかった自分自身を引き出すことができたようである。またB氏は、これまで他者との関わりに壁を感じていたが、本旅行では他者と気兼ねなく過ごせる自分に気が付き、旅行後にも他者交流を楽しむようになっていた。

これらからは、今回の温泉旅行は、他者交流を促し、他者との壁を解消し、新たな人間関係の構築を促進させたものと解釈できる。

温泉旅行では温泉浴の効用が注目されるが¹⁸⁾、今回の温泉旅行では、他者との壁を解消し、新たな人間関係を構築し、その後の人間関係を再構築するという効用が示唆された。よって、リハビリとしての温泉旅行は、温泉浴にこだわらず、それ以外の時間にも工夫を凝らす必要があり、利用者同士の交流を深める仕組みを整備することも工夫の一つになると考えられる。利用者の新たな人間関係構築の促進という効用は、昨今、希薄になっている地域の人間関係¹⁹⁾やコミュニティの再生に貢献すると考えられ、リハビリとしての温泉旅行の可能性を示すものと期待できる。

以上より、今回の温泉旅行では、A氏は新たに温泉浴に行こうとする気持ちを育み、B氏は新たな人間関係の構築を促進させていたことがわかった。A氏に温泉浴へ行きたいという気持ちが芽生えた意義は大きく、今後の生活の質を高めていくものと考えられる。また、B氏の新たな人間関係の構築も、その後の生活に大きく影響するものと考えられる。このようにA、B両氏ともに、今回の温泉旅行は、旅行直後の身体機能や生活を大きく変えるものではなかったが、その後の生活や生き方を変化させるものであると考えることができる。

これらは、個々の要介護高齢者において温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度が異なることや、同じ温泉旅行でも自己変化の内容やメカニズムが異なることを示唆したといえる。したがって、リハビリとしての温泉旅行の効用も、個々の要介護高齢者では異なることが理解できる。また、温泉旅行は、温泉旅行直後の身体機能や生活を変化させるものではないが、その後の生活や生き方を大きく変化させる効用が期待できることもわかったといえよう。

今後、こうした知見をさらに明らかにし、温泉旅行をリハビリとして応用できれば、有効なプランが企画でき、要介護高齢者の生きがいづくりや人間関係構築等に役立つと考えられる。

4.3 本研究の限界と課題

本研究の限界は、事例研究であるため本結果の一般化が難しいところにある。また、インタビューによる語りから行う変化の解釈の妥当性も判断が難しい。これらは語りから変容を読み解く研究の限界でもある。

よって、今後はさらに対象者を増やし、経年変化も含めた多様な変化を明らかにすること、それらをもとに必要な評価項目や効果を明らかにしていくことも課題となる。また、それらの効果をもとに温泉旅行を企画、整備し、その有効性を検証していくことも現実的な課題となろう。加えて、どのようなプランやスタッフの関わりが参加者の変化を促す有効な支援につながるかも検討しておく必要性が認められよう。

5. 結論

本研究により、要介護高齢者向け日帰り温泉旅行の行程にある各活動場面の楽しみの程度は個々によって異なることが示唆された。また、温泉旅行による影響としては自信を回復させることや人間関係の構築を促進させることが示唆された。

謝辞

本研究を実施するにあたり、快くインタビューに応じてくださいました対象者および協力者の方々には心よりお礼申し上げます。

<利益相反について>

本論文は、株式会社阿智屋神観光局から研究経費の交付を受けて実施した。

(2019.12.20- 投稿, 2020.3.21- 受理)

文 献

- 1) 星旦二, 長谷川明弘・他. 都市郊外在宅高齢者における楽しみと生きがいの実態とその三年後生存との関連. *社会医学研究*34 (2) : 85-92, 2017.
- 2) 原田隆, 加藤恵子・他. 高齢者の生活習慣に関する調査 (2) 余暇活動と生きがい感について. *名古屋文理大学紀要* 11 (0) : 27-33, 2011.
- 3) 江見和明, 椋田政春. 地方中核市部における高齢者の暮らしぶりに関する考察—高齢者ニーズ調査の結果から—. *滋賀短期大学研究紀要*42 : 89-105, 2017.
- 4) 鏡森定信. 泉質別にみた温泉の効果. *日本温泉気候物理医学会雑誌*69 (4) : 223-233, 2006.

- 5) Tenti S, Cheleschi S, et al. Spa therapy : can be a valid option for treating knee osteoarthritis?. *International Journal of Biometeorology*59 (8) : 1133-1143, 2014.
- 6) 前田豊樹, 三森功士・他. 温泉入浴習慣の効果と有害現象. *日温気候物理医学会誌*82 (2) : 41-47, 2019.
- 7) 白倉卓夫. 温泉医学の現在と未来. *日温気物医誌*66 (1) : 13-16, 2002.
- 8) 上岡洋晴, 塩澤信良・他. 温泉による運動器疾患の予防効果に関するコホート研究のシステマティック・レビュー. *日温気候物理医学会誌*73 (2) : 85-91, 2010.
- 9) 鏡森定信, 中谷芳美・他. 温泉利用とWHO生活の質 温泉利用の健康影響に対する交絡要因としての検討. *日温気候物理医学会誌*67 (2) : 71-78, 2004.
- 10) 延永正, 片桐進・他. QOLからみた短期温泉療養の効果. *日温気候物理医学会誌*65 (3) : 161-176, 2002.
- 11) 上岡洋晴, 栗田和弥・他. 温泉の効果に関するエビデンスの整理と健康づくりを中心としたレジャーへの応用. *身体教育医学研究*11 (1) : 1-11, 2010.
- 12) 牧野博明, 戸田雅裕・他. 温泉地での長期滞在によるストレス低減効果の検証及び短期ツアーとの比較. *観光研究*21 (2) : 31-39, 2010.
- 13) 荒川雅志. スパセラピーのエビデンスーヘルスツーリズム振興に向けた学術基盤整備ー. *琉球大学観光科学*2 : 47-62, 2010.
- 14) 杉本興運. 日帰りハイキング旅行における観光者の感情変化についての一考察. *観光科学研究*10 : 19-29, 2017.
- 15) 川久保暲, 小口孝志. メンタルヘルス・ツーリズムとしての短期旅行が従業員の精神的健康に及ぼす影響. *日本国際観光学会論文集*22 : 179-185, 2015.
- 16) 竹田明弘. わが国におけるヘルスツーリズム研究の現状と課題. *観光学*21 : 35-44, 2019.
- 17) 中田弾, 牟田聡子・他. 宿泊施設の建物種別の違いによるバリアフリー化に関する考察 宿泊施設におけるバリアフリー化に関する研究 その2. *日本建築学会計画系論文集*81 (724) : 1251-1258, 2016.
- 18) 松原勇. 温泉を利用した健康増進についての包括的考察ー国内の最近 25 年の論文の紹介を中心にー. *石川看護雑誌* 7 (10) : 97-107, 2010.
- 19) 総務省 : 都市圏のコミュニティの現状と課題.
[http://www.soumu.go.jp/main_content/000456883.pdf]
(最終アクセス日 : 2019年12月19日)

An Explorative Study of the Possibility of a Hot Springs Trip as a Community-Based Rehabilitation Service: A Case Study

Kazuma KITA * Koji IKEDA**

*Department of Rehabilitation, North Osaka Housenka Hospital. (1-2-2 Muroyama, Ibaraki-shi, Osaka 567-0052, JAPAN)

** Department of Health Science, NARAGAKUEN University. (3-15-1, Nakatomigaoka, Nara-shi, Nara, 631-8524, JAPAN)

Abstract

Purpose: To clarify the impact of a hot springs trip (HST) and several activities in the trip on elderly individuals with disabilities to establish HSTs as community-based rehabilitation services.

Methods: The subjects were two elderly individuals with disabilities who attended a one-day HST.

The method comprised semi-structured interviews. In the interviews, we investigated the degree of pleasure experienced in each activity on the HST and the change in the subjects and families after the HST.

Results: Individual A enjoyed all activities on the HST including bathing. Individual A talked about the desire to attend an HST but the inability to attend after experiencing a stroke 10 years prior. That is, the successful experience of the HST restored individual A's confidence in participating in HSTs. Individual B enjoyed the activities before and after bathing on the HST. Individual B built new interpersonal relationships during the HST.

Conclusion: This study showed that HSTs and several activities on HSTs have various influences in elderly individuals with disabilities. The effects of HSTs were the restoration of confidence and the building new interpersonal relationships.

Key Word : community-based rehabilitation, hot springs trip , elderly individual with disability